

# 秘境を求めて

## 【序文】

現代社会に、秘境は存在するだろうか。

地球上に遍在していた、秘境と呼ばれる場所は、開拓する者によって次々と発見され、メディアに乗って多数の受け手へと届けられるようになった。情報化社会に生きている私たちの生活は、かつての「見えないもの」が、瞬時に「見えるもの」へと変換される。秘境という場所も、観光地化が進み、白日の下にさらされるようになった。それは、昨今のアート事情がそうであるように、有益なる社会資源として駆り出されたのである。

しかし、どんなに白日の下に、眼に「見えるもの」「見えやすいもの」が拡がろうとも、かつての宗教や、芸術の原初力が持っていた「見えないもの」そのものを希求する心の表現が、人々の間から消え去ったわけでは決してない。そこは、「見えないもの」への飽くなき質が拡がっている世界。理性や合理性で固められた高い利便性の領域がある一方で、意識と無意識の交わる、知覚と理解力の及ぶ範囲外へと飛び出していく心の領域が、そこに脈々と呼吸し、生き続けているのである。この現代の、一見、「見えやすさ」で拡がる世界でも、数少ない心の開拓者によって目指された彼岸の洞窟は、人知れず掘り続けられてきているのである。心のダイバーとも呼べる彼らの基準からすれば、世界は決して「見えやすさ」で拡がるフラットな均質空間であるはずはない。極めて、凸凹の激しい環境上にしか精神生活や芸術作品は存在しないのだから。

今、そんな心の開拓者であった詩人、アンリ・ミショー、トリスタン・ツァラ、オクタビオ・パスのように、心の深度へと関心をもった者たちで、「見えないもの」を視座にした場所が、此処に起動する。「見えないもの」を「見えるもの」として白日の下に拡大したアートの単系理論(アートの自己目的化)と、社会資源(アートの応用化)によって、まさにそのまま忘却され、「見えないもの」になってしまった文脈の洞窟がそこに出現するのだ。文脈の洞窟は、市場の洗礼に屈した、いや、むしろ有効活用したアンディ・ウォーホル、ジェフ・クーンズ、ダミアン・ハースト、村上隆、会田誠らのアイデアに満ちたアーティストたちの年代ごとの戦略モデル(business for art history)と、それを批判と称賛によって支えてしまう(お金が回ってしまう)観客の外に、存在する。洞窟芸術の本質とは、まさに「見えないもの」という「社会の離れ」に他ならないからだ。

ミショーや、ツァラ、パスといった詩人に共通していたのは、社会の外を知ることだった。心の高次元な旅に出かけることだった。眼に「見えるもの」を飛び越え、心の秘境を創ることだった。

今、ここに集うことは、21世紀の洞窟芸術(特異性)を発掘することである。心のなかに眠った至福の深さを、全身全霊で甦らせ、芸術という秘境の場所(他なる時空)を回復させることである。忘却の中に沈殿した芸術の根源性は、社会漬けになったアート制度から離れた、マージナルな場所にこそ光輝くものだからである。

清岡 正彦